

## 古墳出現期の沼津

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝沢, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/6713">http://hdl.handle.net/10297/6713</a>

# 古墳出現期の沼津

滝沢 誠

## はじめに

沼津市東熊堂の辻畑古墳は、近年行われた本格的な発掘調査の結果、古墳出現期にさかのぼる最古段階の前方後方墳である可能性が高くなりました。ここでは、辻畑古墳の調査成果を中心に、古墳出現期の沼津について考えていきたいと思います。

さて、辻畑古墳の調査成果は、静岡県東部における古墳の出現について、従来の理解を大きく塗り替えるたいへん重要なものです。とはいえ、それだけで古墳出現期の沼津が語れるわけではありません。じつは、この十年以内の間に、沼津市内では今回のテーマに関する重要な調査成果がもう一つありました。それは、沼津市松長にある市の指定史跡、神明塚古墳に関する調査成果です。この神明塚古墳も、あ

らたな発掘調査の結果、古墳時代前期にさかのぼるとも古い時期の前方後円墳であることが明らかとなったのです。

古墳時代は、およそ三世紀の中頃から六世紀の終わり頃にかけてつづいた時代で、平面形が鍵穴形をした前方後円墳と呼ばれる特徴的な古墳が日本列島の各地に築かれました。その最大級のもの、現在の奈良県や大阪府に集中的に分布していることから、そうした現象の背後にヤマト王権の成立を認め、それを中心としたひろい政治的まとまりが日本列島に初めて出来上がった時代であると考えられています。

一般に古墳時代は、前期、中期、後期の三時期に区分されています。これまで静岡県東部では古墳時代前期後半にさかのぼる古墳は知られていましたが、今回調査が行われた辻畑古墳、そして神明塚古墳は、それらよりもさらに古

くさかのぼる時期の古墳であると考えられます。とくに辻畑古墳は、東日本全体の中でも最古段階に位置づけられる、数少ない前方後方墳であると思われます。これらの調査成果は、この地域のみならず東日本における古墳の出現を理解していく上でもきわめて重要な資料を提供するものなのです。

以下、辻畑古墳と神明塚古墳の調査成果を順次紹介しながら、それらの年代や性格を検討し、最後に古墳出現期における沼津の歴史的評価について考えていきたいと思えます。

## 1 辻畑古墳の調査

### †古墳の位置

図1は、静岡県東部の沼津市から富士市にかけて確認されている大型古墳の分布を示したものです。この図は、三百年以上にわたってつづく古墳時代の間に築かれた前方後円墳や前方後方墳さらには大型の円墳を示したもので、それらのすべてが同時期に築かれたということではありません。むしろ、それらは年代を異にして築かれていることから、それぞれの時期に築かれた各地域における有

力者の墓であると考えられます（滝沢二〇〇五）。

その点をふまえた上で、この図に示した大型古墳の分布を大きくとらえると、現在の沼津市内に分布するグループと、富士市内に分布するグループに分けることができます。さらに細かくみると、砂丘上に分布する古墳を別のグループとしてとらえることも可能ですが、ここではひとまず、かつて愛鷹山の南側にひろがっていた浮島沼の両側に大型古墳のまわりがあることを確認しておきたいと思えます。

いうまでもなく、ここで取り上げる辻畑古墳は、いま述べたグループのうち、沼津市側のグループに属しています。現在の場所としては、JR沼津駅から北方に約2kmの地点



図1 沼津周辺における大型古墳の分布（★は辻畑古墳）

で、国道1号線のすぐ北側に位置しています。また、地形的にみると、愛鷹山から南に延びる尾根の末端に立地しています。

今回の発掘調査が行われる以前、この古墳の上には「高尾山穂見神社」が鎮座していました。つまり、結果的には辻畑古墳の後方部にあたる部分が社殿をいたたく高まりとして利用されていたわけです。この高まりについては、以前から古墳の可能性が指摘されていましたが、それを裏付ける明確な証拠はありませんでした。そうした中で、この部分を通して国道1号線につながる大きな道路の建設が進められることとなり、二〇〇五年度と二〇〇七年度には、神社の移転工事などにもなる部分的な発掘調査が沼津市教育委員会によって行われました。その結果、この高まりは前方後方墳の後方部であることが確認され、二〇〇八年度から二〇〇九年度にかけて、本格的な発掘調査が行われることになったのです。

#### †墳丘の形態と規模

図2は、発掘調査によって明らかとなった辻畑古墳の測量図です。図の上側（北側）が後方部、下側が前方部で、左側（西側）は現在も使われている道路によって一部が破

壊されています。図に示されているように、調査の結果この墳丘の周囲には墳丘の形に沿うように幅七〜九メートルの周溝がめぐっていることが判明しました。そして、この周溝の内側を基点に計測すると、墳丘の長さは約六〇メートルになります。

じつは、調査が行われる以前、辻畑古墳の前方部は完全に削り取られており、社殿が載っていた後方部も周囲が削り取られて本来の形をとどめていませんでした。ですから、古墳であるか否かの見分けも難しかったのですが、今回の発掘調査でこの周溝が確認されたことにより、前方後方墳であることが確かめられたわけです。

周溝の内部からは多量の土器が出土しました。それらの土器の出土状況や接合状況については、現在整理中のため

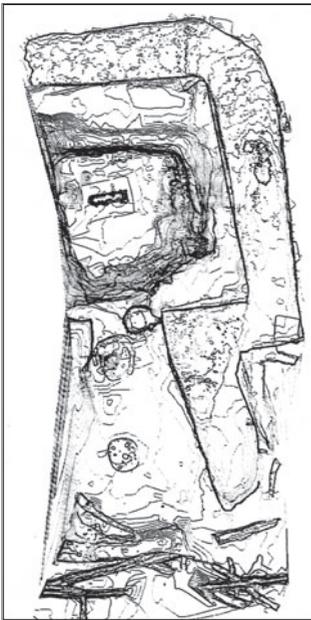


図2 辻畑古墳（現地説明会資料より）

詳しいことはまだわかりません。ただ、今回のように多量の土器が出土しますと、それらがすべて古墳にともなうものなのかどうかという疑いが生じてきます。つまり、それらは古墳築造以前に存在した集落で使われていた土器が混入したものでないか、という見方が出てくるわけです。しかし、辻畑古墳が立地する尾根の先端部は非常に幅が狭く、その部分に大規模な集落の存在を想定することはできませんし、実際の発掘でも周溝から出土した土器の年代に相当する集落の跡は確認されていません。また、周溝から出土した土器は、完全に近い形に復元できそうなものも多く、破片の割れ口も総じてシャープな状態を保っています。これらの事実から、周溝内出土の土器は、平安時代に属する一部の土器を除いて、基本的に辻畑古墳にかかわる祭祀に使用されたものであろうと考えられます。

#### ↑墳頂部の土器

後方部の墳頂部では、もともとあった社殿を解体し、その基礎を抜き取って表面を清掃した段階で、中心部の二ヶ所に土器のまとまりが確認されました。これは後になってわかったことですが、これらの土器は埋葬施設に納められた木棺のほぼ真上にあたる位置に置かれたもので、それぞ

れが一個体をなす壺形の土器でした。しかも、副葬品の配置から想定される被葬者の頭側と足側にそれぞれ一個体ずつ、意識的に土器を配置したものとみられます。埋葬時の儀礼に使われたとみられる土器が、本来の配置をほぼ保った状態で検出されることはきわめて稀で、その点で大変貴重な資料と言えるものです。

この二つの壺のうち、頭側に置かれていたのは大廓式の大壺です。大廓式土器は、沼津市の大廓遺跡で出土した土器をもとに設定された駿河東部地域の土器様式で、古墳時代前期前半を中心に使われていた土器です。その中には特徴的な大型の壺が知られており、今回出土した土器はその下半部しか残っていませんでしたが、まさにその大型壺とみて差し支えないものです。

一方、足側に置かれていたのは、いわゆる二重口縁壺です。口の部分が段をなしているのが特徴的な土器で、古墳時代前期には古墳での祭祀によく用いられた土器です。今回出土したものは頸の部分が直立するタイプのもので、近畿地方を中心に発達していく一群の系譜を引くものとみられますが、段の部分が二段になっているものは他に例がなく、その点をどのように理解するのかは今後の課題と言えるでしょう。

これらの壺とは別に、後方部の墳頂部では、東海西部系の加飾壺、いわゆるパレススタイル壺の破片が出土しています。その破片は、発掘前の清掃段階でも採集されていますが、いまのところその個体数を把握することはできません。ただ、ここで注目すべきは、墳墓祭祀の中でもっとも重要な位置を占める埋葬儀礼に際して、在地の土器のほかに、それぞれ系譜を異にする外来の土器が用いられていたとみられる点です。こうした事実は、この古墳に葬られた人物が在地の集団に基盤をもつばかりではなく、より西方の有力地域との間に強い結びつきをもっていたことを示しています。

#### † 埋葬施設と副葬品

先ほど述べた二つの土器の下からは、墳丘の主軸にほぼ直交するかたちで東西方向の埋葬施設一基が検出されました。そこでは、墓壙と呼ばれる長方形の大きな穴を設け、その中心部分に木棺を納めている状況が判明しました。木棺は長い年月の間に腐ってしまい、すでに失われていましたが、木棺を据え付けた痕跡から、その大きさは長さ五・一メートル、幅一・二メートルと推定することができます。また、木棺を納めるための墓壙は、墳丘を造った後に墳頂部

から掘り込んだものではなく、墳丘を造る過程で墳頂部を凹ませた、いわゆる構築墓壙であるとみられています。

埋葬施設内からは、副葬品として、銅鏡一、勾玉一、鉄槍二、鉄鏃一束、鈍一が出土しました。その詳しい出土状況をみていきますと、まず木棺西側の北辺で、身が長い鉄槍と鉄鏃の束が出土しました。これらの鉄槍と鉄鏃は、いずれも鋒を西側に向けていました。また、鉄槍の長柄とみられる痕跡が、木棺の北辺に沿って東側に延びていく状況も確認されました。木棺の中央部からは、勾玉一点が出土しました。それより東側の北辺からは、銅鏡一面が割れた状態で出土し、さらに東側の木棺北辺寄りでも、身が短い鉄槍と鈍が出土しました。

こうした副葬品が出土した一方で、被葬者の遺体にかかわる痕跡は一切確認されませんでした。長い年月の間に、骨にいたるまで完全に腐ってしまったようです。ただ、これまでの調査事例から、銅鏡は被葬者の頭や胸付近に副葬されたものが多く、また、木棺の幅は被葬者の頭がひろいという傾向が指摘されています。これらの点から判断すると、この被葬者は、頭を東側に向けて伸展葬で埋葬されていたとみることができます。さきほど、墳頂部から出土した土器に関連して、頭側、足側という表現を用いましたが、

それはこうした判断をふまえてのことなのです。

このほか棺内では、被葬者の頭から胸付近とみられる場所を中心に、明瞭な朱の広がりが確認されました。科学的な分析を行わなければ確かなことは言えませんが、おそらく水銀朱であろうと思われます。遺体の埋葬に際して朱を散布したものとみられますが、このような風習は、古墳時代前期を中心にひろく認められるものです。

## 2 辻畑古墳の年代

### 土器の編年的位置

辻畑古墳の調査成果においてとくに注目されるのは、その築造年代がきわめて古く遡るのではないかとみられる点です。もちろん、たんに古いということが重要なではありません。それほど古い時期の古墳が当地域に築かれたことの意味が重要なのですが、そうした意味を探っていく前提として、この古墳の年代についての認識を深めておく必要があります。

そこで、辻畑古墳の年代を知る手がかりとしてまず問題になるのは、周溝内や墳頂部から出土した土器の編年的位置づけです。多量に出土した土器は現在整理中であり、詳

しい内容はまだわかりませんが、後方部東側の周溝内から出土した一点の高坏（図3の下）はきわめて重要な資料と言えるものです。

この高坏は、坏部

の下側が屈曲する有稜高坏と呼ばれるものです。じつは、古墳時代前期の半ば過ぎまで、沼津を含む東日本諸地域の土器は、東海西部（伊勢湾沿岸地域）の土器の強い影響下にあります。つまり、東海西部の土器の形態や製作技法を採用するかたちで在地の土器生産が行われるわけですが、そこには東海西部から持ち込まれたとみられる搬入品もわずかながら存在しています。そして、今回出土した問題の高坏は、使われている粘土や全体のつくりから判断して、東海西部からの搬入品と考えられるものなのです。

東海西部には、こうした土器がつけられていた頃の代表的な遺跡として愛知県の廻間遺跡があり、同遺跡の出土土器を中心として、いわゆる廻間編年が組み立てられています（愛知県埋蔵文化財センター一九九〇）。その編年を念

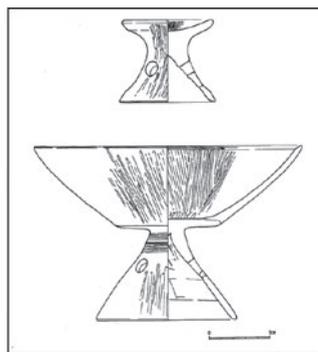


図3 辻畑古墳出土の土器（現地説明会資料より）

頭におきながら今回出土した高坏をみた場合、口唇部に明瞭な面をもつ坏部はやや浅い形態をとるものの、内湾気味の脚部は上部に数条の沈線文様をとまなうという特徴を指摘することができます。これは、廻間Ⅱ式の前半から中頃までの特徴とみることができそうです。

ところで、奈良県の箸墓古墳は、墳丘長約二八〇メートルを測る前方後円墳で、巨大な前方後円墳としてはもっとも古く遡るものとみられます。その年代は、奈良盆地における土器編年の布留Ⅰ式に位置づけられており、それは東海西部の土器編年における廻間Ⅱ式の終わりから廻間Ⅲ式の初め頃に併行するものと考えられています。つまり、いまかりにこの高坏が辻畑古墳の築造年代を示しているとした場合、その年代は箸墓古墳よりも古く遡ることになるのです。これは、古墳の出現を理解する上で見過ごしがたい問題です。

ここで注意しなければならないのは、辻畑古墳の周溝内から出土した土器にはやや年代の幅があるとみられることです。現在整理中の土器の中には、廻間Ⅲ式に併行する時期の土器も多く含まれているようです。そうなると、どの時期の土器が古墳の築造年代を示しているのか、より慎重な判断が求められます。さきほど述べたように、周溝内か

ら出土した多量の土器は基本的に古墳にとまなうものとみられますが、それらの中には、埋葬以前の祭祀に用いられたものや、埋葬終了後の追加的な祭祀に用いられたものが含まれている可能性を考えてみなければなりません。

#### †副葬品の特徴

辻畑古墳から出土した副葬品のうち、銅鏡と鉄鏃については、その特徴からおよその編年の位置を探ることができます。

銅鏡は、木棺内から割れた状態で出土しました。今回検出された埋葬施設には、いっさい盗掘の痕跡はありませんでしたので、これは盗掘の影響によるものとは考えられません。となると、木棺の腐朽にともなって自然の力で割れた可能性も考えられるわけですが、どうもこの鏡はもともと割れた状態で副葬されていたようです。やや離れた位置から出土した小さな破片もありますが、それらを集めてみても完全な鏡の形に復元することはできず、かなり足りな部分認められるのです。

じつは、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて、鏡を意図的に割って副葬したり、割られた鏡の破片を副葬したりする風習が特徴的に認められます。前者は「破

「破鏡」、後者は「破鏡」と呼ばれるものです。そのうち、今  
回出土した鏡を破砕鏡とみてよいならば、それはいま述べ  
たような年代的傾向を指し示すものと考えられます。

鏡の背面には文様が鑄出されています。その特徴から、  
この鏡は六つの乳の間に獣像などを配した、六像式の「上  
方作系浮彫式獣帯鏡」とみることができまます。この形式の  
鏡は、二世紀代の中国で製作されたものとする意見（岡村  
一九九三）があり、東日本では、長野県の弘法山古墳や中  
山三六号墳、千葉県の高部三二号墳といった出現期古墳で  
の出土例が認められます。その点を重視すれば、鏡の形式  
自体もきわめて古い年代を示すものと言えるでしょう。

約三〇点が出土した鉄鍔は、特殊なつくりの一点を除く  
と、柳葉式と腸袂三角形形式に大別することができます。そ  
のうち柳葉式の鉄鍔は、両側面がS字状カーブをなす典型  
的な形態で、鍔身部と莖部の間に明瞭な段差が認められる  
重厚なつくりが特徴的です。近年の研究成果にしたがえば、  
古墳時代前期前半段階の特徴とみることができるとは  
（水野二〇〇八）。いっぽう腸袂三角形形式の鉄鍔は、全国的  
に類例が乏しい形態です。その多くは古墳時代前期中頃以  
降の古墳から出土していますが、時期が降るにつれて次第  
に大型化する傾向が認められます（川畑二〇〇九）。その

点で比較すると、今回の出土例はもつとも小型の製品とな  
りますので、従来の類例よりも年代的に先行するあらたな  
事例とみることができそうです。

#### †古墳の年代

いま述べてきた土器や副葬品は、いずれも古墳時代が始  
まる頃のきわめて古い年代を示しています。もちろん、土  
器についてはやや年代の幅がありますから、今後それらを  
めぐって古墳の年代に関する様々な意見が出てくるに違  
ありません。しかし、ここでもう一つ注目しておきたいの  
は、今回辻畑古墳から出土した副葬品の種類や組合せです。  
それは、東日本の中でもつとも古い時期に築かれたと考え  
られている前方後方墳の副葬品と大変よく似ているのです。  
表1は、東日本における出現期古墳の副葬品をまとめた  
ものです。このうち、前方後方墳である長野県弘法山古墳  
と千葉県高部三二号墳からは、辻畑古墳と同じく上方作系  
浮彫式獣帯鏡が出土しています。しかも、高部三二号墳の  
鏡は破鏡として出土しており、鏡の種類は異なりますが、  
高部三〇号墳からは破砕鏡が出土しています。また、弘法  
山古墳では、鏡のほか玉、剣、槍、鍔、斧、鉈が出土し  
ていて、その組合せは辻畑古墳のそれとよく似ています。

表1 東日本出現期古墳の副葬品

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	副葬品					
				鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鐵	工具
辻畑	静岡県	■	59.5	浮彫式獸帯鏡1 (破砕鏡)	勾玉1	—	2	鉄鐵31(柳葉、腸扶柳葉)	鉈1
弘法山	長野県	■	63	浮彫式獸帯鏡1	ガラス小玉738 管玉2	1	2	銅鐵1(柳葉) 鉄鐵24(柳葉、定角)	鉄斧1 鉈1
高部32号	千葉県	■	32	浮彫式獸帯鏡1 (破鏡)	—	—	2	—	—
高部30号	千葉県	■	34	二神二獸鏡1 (破砕鏡)	—	2	—	—	—
神門5号	千葉県	●	(42.5)	—	ガラス小玉6	1	—	鉄鐵2(多孔)	—
神門4号	千葉県	●	(49)	—	管玉31 ガラス小玉394	1	1	鉄鐵41(定角)	—
神門3号	千葉県	●	(53.5)	—	管玉10 ガラス小玉103	1	1	鉄鐵2(柳葉)	鉈1

●:前方後円墳、■:前方後方墳/括弧内の数値は復元値。

個々の出土品の年代だけではなく、こうした副葬品の組合せなどをあわせて考えると、辻畑古墳の年代は、やはり相当に古いとみるべきでしょう。その結論は、出土品のさらに詳しい検討をまっとうしなければなりません。現状で判断する限り、辻畑古墳の年代は、奈良県箸墓古墳の年代に近接しつつ、それを遡る可能性があるともみてよいでしょう。

### 3 神明塚古墳の調査

#### 十古墳の位置

近年、沼津市内では前期古墳に関するもう一つの重要な調査成果が得られました。それは、沼津市松長にある市の指定史跡、神明塚古墳に関する調査成果です。

神明塚古墳(図4)は、さきほどの辻畑古墳とは異なり、主な墳丘の部分が円形をなす前方後円墳です。JR片浜駅から東に約二〇〇メートル離れたJR東海道線沿いに位置して、地形的には、駿河湾に沿って延びる田子の浦砂丘上に立地しています。

この古墳については、その保存整備を求める地元の要望に応じ、一九八二年(昭和五七)に沼津市教育委員会

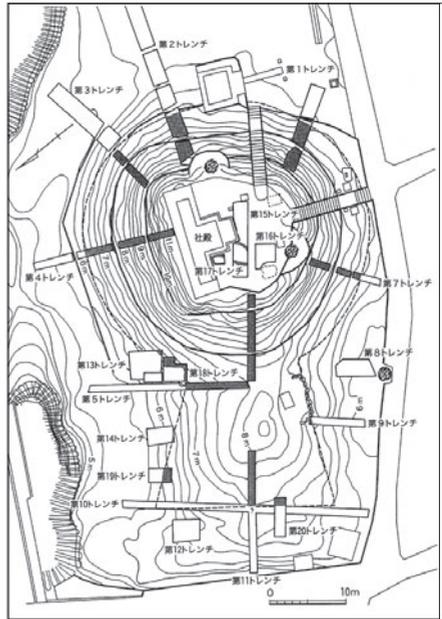


図4 神明塚古墳 (沼津市教育委員会 2005)

による発掘調査が行われました。ここでは、墳丘の範囲確認を目的として合計一七ヶ所のトレンチ調査が行われ、各トレンチからは多くの土器片が出土しました。それらの土器片は、一部の弥生土器片をのぞくと、すべて古墳時代前期の土器片でしたが、いずれも周辺に予想されていた古墳時代集落遺跡からの混入品と判断され、古墳にともなう土器であるとは考えられませんでした(沼津市教育委員会一九八三)。

この神明塚古墳のほか、沼津市内には二基の前方後円墳の存在が知られています。辻畑古墳と同じく愛鷹山麓に営

まれた長塚古墳と子ノ神古墳です。この二基の前方後円墳は、古墳時代中期後半から後期にかけて営まれたものと考えられていましたから、当時の調査者たちは、出土した土器を混入品とみなした上で、それら二基との連続性を重視して、神明塚古墳の年代を古墳時代中期後半と推定することになったのです。

ただし、古墳時代中期の遺物(土器)は一切出土していませんでしたから、私自身はその年代について再検討の余地があると考えていました。そうした折、沼津市史編纂事業の一環として、二〇〇三年(平成一五)に自らの手で神明塚古墳の部分的な発掘調査を行う機会に恵まれ、従来の見方に再考を迫るあらたな成果を得ることができたのです。

#### ↑あらたな成果

一九八二年の調査ではかなり多くの部分で調査が行われていたため、二〇〇三年の調査では必要最小限の範囲に絞って三ヶ所のトレンチ調査を行いました。その結果、古墳時代前期の土器は墳丘の周囲に堆積した土の中から出土し、わずかに確認された墳丘の盛土中からは出土しませんでした。また、以前にもっとも多くの土器片が出土したトレンチは、その調査範囲が墳丘周囲の堆積土中にとどまってい

て、盛土中には達していないことも判明しました。つまり、これまで混入品としてきた古墳時代前期の土器は、この古墳で執り行われた祭祀に用いられたものである可能性が高いと考えられるようになったのです（沼津市教育委員会二〇〇五）。

この点に加えて、二〇〇三年の調査では神明塚古墳の年代を決定づける重要な発見がありました。それは、図5に示した底部穿孔二重口縁壺の発見です。この底部穿孔二重口縁壺は、土器を焼く前に底の部分に孔をあけてつくられたもので、当然のことながら、壺としての本来の使い方はできません。こうした土器は、古墳祭祀用の土器として古墳時代前期にひろく認められるものです。

図5は、出土したいくつかの破片をもとに図上で復元を行ったものですが、じつはそれらの破片の中であらたに出土したのは、底部穿孔が認められる底部の破片のみです。それ以外の破片は以前の調査ですべて出土していたものです

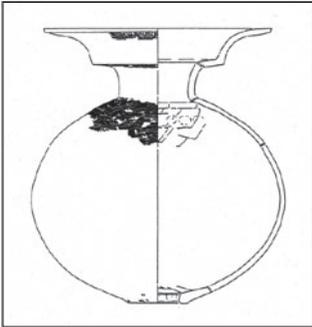


図5 神明塚古墳出土の底部穿孔二重口縁壺（滝沢編 2005）

が、それらの破片が出土したトレンチのすぐ脇であらたに調査したところ、問題の底部片が出土したというわけですが、これらの破片は互いに接合しないので、同一の個体であるという保証はありません。しかし、赤く塗られた器面の状態やその厚み、焼き具合などをみても、同じつくりの土器であることは明らかです。図5は、そうした認識にもとづいて作成した復元図ですが、実態をかかなりの程度反映したものと考えています。

神明塚古墳に関するあらたな調査の結果、これまで出土していた古墳時代前期の土器は古墳にとまなうものとみられること、また、前期古墳に特徴的な底部穿孔二重口縁壺をとまなうことが明らかとなりました。

それらの土器の詳しい編年的位置付けを検討すると、先ほど取り上げた廻間編年の中の廻間Ⅲ式前半に併行する時期とみることが出来ます。この土器の年代を重視すれば、神明塚古墳は、辻畑古墳よりはやや遅れて築かれた前方後円墳ということになります。ただし、東日本において前方後円墳がひろく築かれるようになるのは、さらにその後の段階になりますから、神明塚古墳は、東日本の中でも比較的古い時期の前方後円墳であると言って差し支えないでしょう。

## 4 神明塚古墳の性格

### 十短い前方部

以上のような年代的な理解をふまえて、次に墳丘の形態と埋葬施設の方角に着目しながら神明塚古墳の性格に迫っていききたいと思います。

まず、墳丘の形態についてみると、後円部の直径に対して前方部の長さが著しく短いという点が最大の特徴として挙げられます。あらたな調査によって確認された前方部前端的な位置をもとに測定すると、神明塚古墳の墳丘の長さは五二・五メートルとなります。そして、後円部の直径は約三七メートルと復元できますから、前方部の長さはその約二分の一ということになるわけです。通常の前方後円墳に比べて、かなり前方部が短いタイプとみてよいでしょう。

こうした前方部短小タイプの前方後円墳については、寺沢薫氏が「纏向型前方後円墳」と呼んでいる前方後円墳との関連が注目されます。寺沢氏は、初期ヤマト王権の王都と目される奈良県纏向遺跡の範囲に点在する墳墓のうち、箸墓古墳に先行して営まれた前方部短小タイプの前方後円墳を纏向型前方後円墳とし、それらの中にヤマト王権の最初の有力墓を想定しています。また、すでにその段階で、

それらと同じ規格の墳墓が各地に広がっている点も指摘しています。じつは、寺沢氏はその著書『王権誕生』（講談社、二〇〇〇年）を文庫版（講談社学術文庫版、二〇〇八年）に改訂した際、あらたに沼津の神明塚古墳を取り上げ、纏向型前方後円墳の分布図の中に示しているのです（図6）。この纏向型前方後円墳をめぐることは、最古の定型化した巨大な前方後円墳である箸墓古墳との年代的な前後関係でとらえるので

はなく、箸墓古墳との階層的な関係でとらえようとする意見もあります。箸墓古墳周辺で纏向型前方後円墳とされるものの多くは、墳丘の大きさが箸墓古墳の三分の一程度で

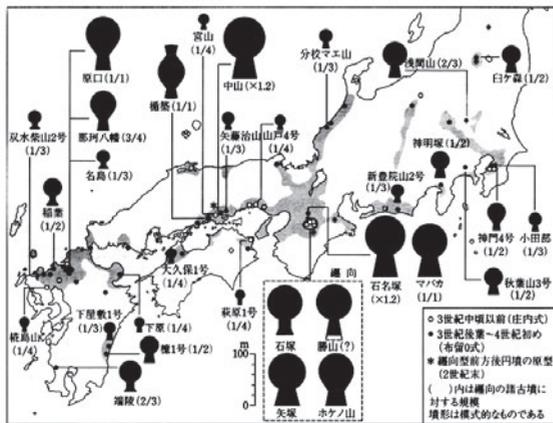


図6 纏向型前方後円墳（寺沢 2008）

すので、最上位墓としてはなく、活動期間を同じくする  
 いわばセカンドクラスの人たちの墓として理解しようとい  
 う考え方です。ここで、その可否を論じる余裕はありません  
 んが、こうした纏向型前方後円墳をめぐる議論は、神明塚  
 古墳の性格をみきわめる上で十分に注意すべき点であらう  
 と考えています。そのように考えるもう一つの理由として、  
 次に埋葬施設の方向に注目してみたいと思います。

### †斜交埋葬施設の問題

神明塚古墳では、一九八二年の調査の際、後円部頂にあ  
 る社殿の脇でも発掘調査が行われ、後円部の中心近くで埋  
 葬施設が確認されています。わずかに上面の一部を確認し  
 ただけですが、その埋葬施設は、木棺の周りを粘土で固め  
 た粘土槨と呼ばれるものであると考えられます。内部の調  
 査は行われていないので、それ以上の詳しいことはわかり  
 ませんが、ここで注目したいのは、その埋葬施設が墳丘の  
 主軸に対して斜めに交わる方向に設置されている点です。  
 こうした斜交埋葬施設については、方位（北）との関係を  
 指摘する見方もありますが、神明塚古墳の場合には、南北  
 方向とも東西方向とも一致していません。

これまで墳丘の主軸方向や埋葬施設の方向などに関する

議論は数多くありますが、斜交埋葬施設を正面から取り上  
 げたものとしては、大阪大学の福永伸哉氏による研究がい  
 まのところ唯一のものと言えるでしょう。福永氏は、墳丘  
 の主軸方向と埋葬施設の方向について整理し、前期古墳で  
 は直交タイプと平行タイプが多数を占めているものの、斜  
 交タイプも一定数存在し、それらの中には前方部が短いも  
 のやいわゆる帆立貝式古墳とされるものが多いことを指摘  
 しています(図

7)。また、そ

の起源は、前  
 方後円墳定型  
 化以前の墳墓  
 の中に求めら  
 れるのではな  
 いかとも述べ  
 ています。す  
 なわち、斜交  
 の意味につい  
 てはなお検討  
 の余地を残す  
 ものの、すで

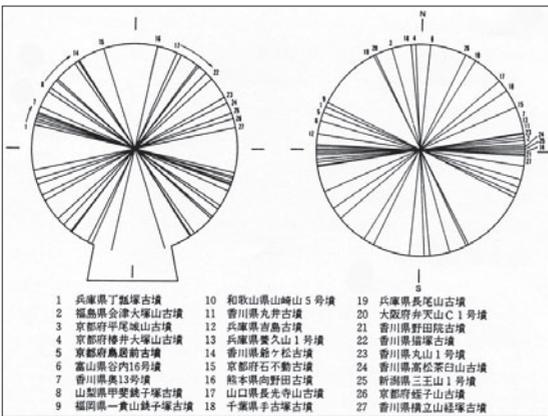


図7 墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係(左)、埋葬施設の主軸方位(右) : 斜交タイプの古墳(福永 1990)

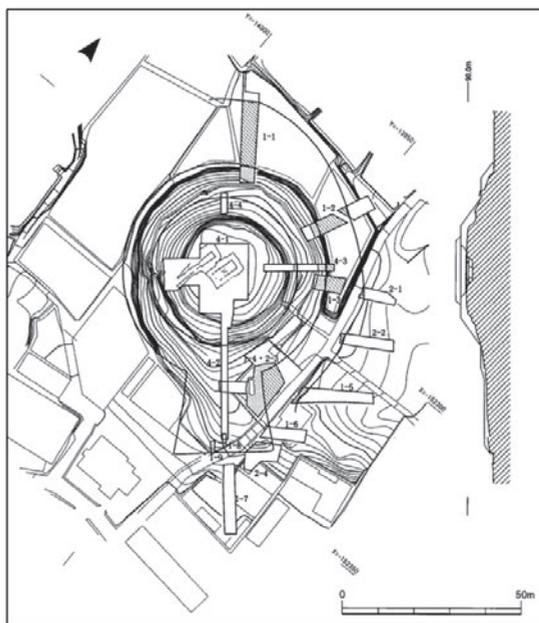


図8 奈良県ホケノ山古墳 (奈良県立橿原考古学研究所 2008)

に古墳時代前夜に成立していた埋葬施設のあり方が、一つの企画として古墳時代以降にも継承されたのではないかというわけです (福永一九九〇)。

この問題を考えるとき、その後に行われた奈良県ホケノ山古墳 (図8) の調査成果は大いに注目すべきものです。この古墳は、いわゆる纏向型前方後円墳の一つで、発掘調査の結果、その埋葬施設は墳丘の主軸に対し斜交していることが判明しました。この埋葬施設は南北方向を意識して

いるとみられますが、先の福永氏の見解をふまえるならば、短小な前方部を特徴とする纏向型前方後円墳において斜交埋葬施設が採用されていること自体が重要であろうと思います。

やはり斜交埋葬施設と短い前方部は、密接なかかわりがあると考えざるをえないようです。その性格の解明は、神明塚古墳の問題にとどまらず、初期前方後円墳の性格にもかわる重大な問題をはらんでいると言えるでしょう。

#### † 斜交埋葬施設の評価

斜交埋葬施設に関する福永氏の研究は、主に西日本の資料を対象として行われたものでした。そこで、東日本の資料についても丹念にみていきますと、やはり前方部が短小な前方後円墳に多くの事例を確認することができます。とくに、古墳時代の前期前半と後期に多くの事例が認められ、前者の中には、千葉県神門四号墳や神奈川県秋葉山三号墳など、出現期にさかのぼる前方後円墳が含まれています (図9)。東日本の前期前方後円 (方) 墳では、墳丘主軸平行タイプが主流ですので、それらの存在はいっそう際立っています。

地元の静岡県内に目を向けますと、神明塚古墳以外に、

古墳時代前期の浜松市馬場平古墳、中期の掛川市各和金塚古墳、後期の浜松市辺田平一号墳に斜交埋葬施設の例をみることでできます(図10)。それらもすべて、前方部短小タイプの前方後円墳です。

こうしてひろく事例を集めてみますと、斜交埋葬施設は、前方部短小タイプの前方後円墳を中心に古墳時代後期にいたるまで認められます。それは、共通した意識のもとに連綿と受け継がれているようにみえます。しかもきわめて重要なことは、斜交埋葬施設をともなう前方部短小タイプの前方後円墳は、少なくとも古墳時代中期以降においては主流となる前方後円墳の形態ではないという点です。前方部短小タイプの前方後円墳は、同時期の大型前方後円墳の周囲に築かれるなど、その従属的な性格を随所に示しています。

斜交埋葬施設をともなう前方部短小タイプの前方後円墳が、その当初から従属的な性格を帯びていたのか、あるいは初現期の形態

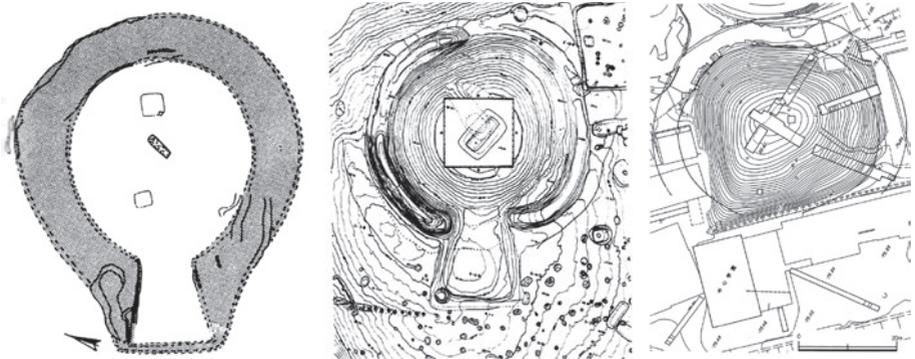


図9 東日本の斜交埋葬施設 (左) 千葉県神門4号墳、(中) 石川県宿東山1号墳、(右) 神奈川県秋葉山3号墳(縮尺不同)

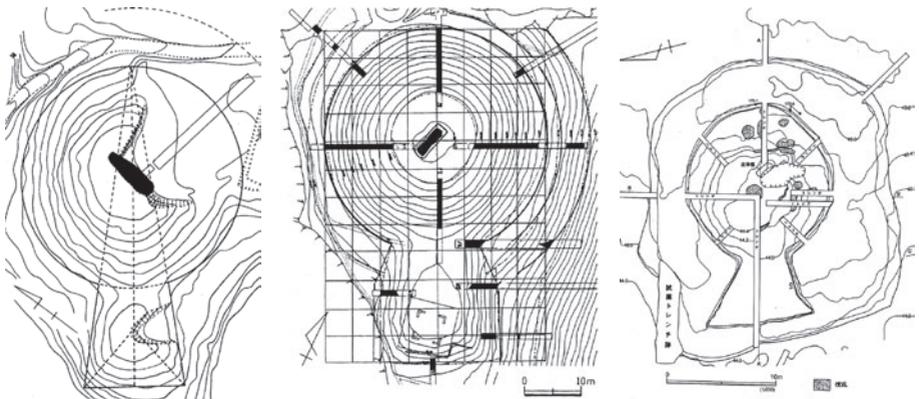


図10 静岡県内の斜交埋葬施設 (左) 浜松市馬場平古墳、(右) 掛川市各和金塚古墳、(右) 浜松市辺田平1号墳(縮尺不同)

として一定期間存在したのち、やがて従属的な性格を帯びるようになったのか、なお慎重な議論が必要であろうと思います。しかし、古墳時代後期にいたるまでそのかたちが受け継がれているとの見方に誤りがなければ、そこには強く意識された継続的な性格が読み取れるのではないかと考えています。つまり、そうした前方後円墳が比較的早い段階からより従属的な性格を帯びていたのではないかと想定しているのです。このことは、神明塚古墳の性格を理解するだけではなく、纏向型前方後円墳の性格を読み解く重要な手がかりとなるかも知れません。

## 5 古墳出現期の沼津

### †東日本における古墳の出現

三世紀の中頃から後半にかけて、箸墓古墳に代表される大型の前方後円墳が、近畿から北部九州にいたる西日本の各地に築かれます。また、これに先立つ三世紀前半には、奈良盆地の東南部に突如として大規模な政治的拠点（纏向遺跡）が形成されます。

こうした一連の動きに中心的な役割を果たした勢力の実像については、研究者の間で意見が分かれています。ただ、

結果的にヤマトに拠点をおいした勢力が、西日本の諸勢力と連携しながらその後につづく政治的統合（ヤマト政権）の原型を形成したとみる点で多くの研究者の意見は一致しています。

いっぽう、同じ時期の東日本では、前方後円墳の面的なひろがりや認められず、各地の有力者の墳墓として一般的に採用されたのは、辻畑古墳のような前方後方墳でした。こうした状況については、初期のヤマト政権において東日本諸勢力の政治的立場が相対的に弱かったため、前方後円墳を築くにいたらなかったのだとする見方があります。しかし近年では、東日本における前方後方墳の起源が東海西部に求められるらしいこと、また、弥生時代の終わりから古墳時代前期にかけての東日本において東海西部の土器の影響がきわめて強いことなどを重視し、前方後方墳を共通して築いた東日本諸勢力の主体性や独自性を認めようという意見が強くなりつつあります。古墳時代前期のある段階まで、西日本は前方後円墳の世界であったのに対して、東日本は前方後方墳の世界であったとみるわけです。

今回の辻畑古墳の調査成果は、まさに以上のような問題を考えていく上で、きわめて重要な資料を提供するものですが、その詳しい検討は今後の資料整理をふまえて行わな

ければなりません。ここでは最後に、辻畑古墳や神明塚古墳が沼津の地に築かれたことの意味を、地域の視点から展望しておきたいと思います。

#### † 辻畑古墳と神明塚古墳

辻畑古墳の後方部頂からは、在地の土器である大廓式の大壺とともに、東海西部系の加飾壺など外来系の土器が出土しています。また、その周溝内からは、多くの在地系土器に混ざって、東海西部系の土器や北陸系、近江系の土器が出土しています。

辻畑古墳が築かれる以前の弥生時代後期には、愛鷹山麓に多くの方形周溝墓が営まれていて、それらの中にはやや大型のものも認められます。しかし、そこでの儀礼に用いられた土器は在地のものが主体で、辻畑古墳のように多くの外来系土器が用いられることはありませんでした。

こうした土器のあり方は、そこに葬られた人物やその人物を支えた集団の交流関係を反映している可能性が高いと思われまゝ。とすれば、辻畑古墳の被葬者は、在地社会に基盤をおきつつも、ひろく外部地域との交流を図ることに、それまでの有力者とは異なる卓越した地位を得ることになったと推測できるのではないでしょうか。長さ六〇

メートルの前方後方墳に葬られるような、まさに沼津最初の地域首長というべき人物の誕生には、外部地域との交流が重要な役割を果たしていたと考えられるのです。

辻畑古墳に遅れて築かれた神明塚古墳は、東日本の中では比較的早い時期に築かれた前方後円墳です。その大きな特徴である短小な前方部と斜交埋葬施設は、この古墳が典型的な前方後円墳の系譜とは異なるものであることを示しています。先に述べたように、この二つの要素に早くからの従属的な性格を認めるならば、その造営は、いち早く前方後方墳を築いた地域へのヤマト王権による積極的な関与を示したもののなのかも知れません。あるいは、辻畑古墳の内容からうかがえる広範な地域との交流が、より古い前方後円墳の形態を主体的に採用する契機となったのかも知れません。

この二つの見方以外にも、神明塚古墳の性格をめぐっては今後さまざまな意見が出てくるに違いありません。その際、短小な前方部と斜交埋葬施設の評価が重要な鍵となることを、ここでは強調しておきたいと思えます。

## おわりに

近年、沼津を含む静岡県東部では、相次いで前期古墳の存在が明らかとなりました。今回詳しく紹介した二基のほか、三島市ではあらたに向山一六号墳が確認されています。向山一六号墳は、墳丘長約七〇メートルを測る新発見の前方後円墳で、墳丘確認調査の際に出土したわずかな土器片から判断すると、神明塚古墳とあまり変わらない時期に造営された可能性があります。また、富士市には静岡県内最大の前方後方墳である浅間古墳の存在が知られています。

こうしてみると、沼津を中心とする静岡県東部は、古墳時代前期に継続的に大型の古墳を築いたきわめて有力な地域であったことがわかります。そして、その中でもいち早く前方後方墳や前方後円墳を築いたのがこの沼津の地であり、それは東日本の中でも数少ない他に先駆けた動きであったとみられるのです。

これまで、東日本の太平洋沿岸では、房総半島の東京湾東岸地域にいち早く前方後方形や前方後円形の墳墓が築かれたことがわかっていきます。その学術的な評価は辻畑古墳の調査内容を詳しく検討した上で行わなければなりません。近年の調査成果は、この沼津の地が東京湾東岸地域と並ぶ

古墳出現期における太平洋岸の拠点地域であったことを物語っているように思えます。同じ頃この地域で用いられた大廓式土器は、近畿や関東さらには中部高地方面などにもたらされていますが、そうした交流の基点となった地域であることも、今回の調査成果によってあらためて理解できるのではないのでしょうか。

辻畑古墳が築かれた時期の前後、日常的な活動の拠点である集落のあり方にも大きな変化が認められます。弥生時代後期前半まで沼津の低地に営まれていた集落は、後半になると愛鷹山麓の標高百メートル付近に集中的に営まれるようになります。しかし、古墳時代前期になると、高地の集落は姿を消し、再び低地に集落が営まれるようになります。こうした弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての社会変動の中で辻畑古墳は造営されたと考えられるのです。集落と墳墓にみられる大がかりな変化がどのようにに関係しながら進行し、また、どのような社会の動きを反映しているのか。古墳出現期の沼津を多角的に把握していく作業は、今後の重要な課題と言えるでしょう。

## 補注

二〇一一年七月、「辻畑古墳」の遺跡名称は、地元住民の親しみやすさから、「高尾山古墳」に変更されました。ここでは、記録集としての性格を重視し、公開講座実施当時の名称を採用しました。

## 参考文献

\* 今回の内容にかかわる主なもの。

愛知県埋蔵文化財センター 一九九〇『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第一〇集

岡村秀典 一九九三「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五五集

川畑純 二〇〇九「前・中期古墳副葬の変遷とその意義」『史林』第九二巻第二号

滝沢誠 二〇〇五「浮島沼周辺の首長たち」『沼津市史 通史 編原始・古代・中世』沼津市

寺沢薫 二〇〇〇『王権誕生 日本の歴史02』講談社（講談社学術文庫、二〇〇八年）

奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇八『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第一〇冊

沼津市教育委員会 一九八三『神明塚古墳』沼津市文化財調査報告書第二九集

沼津市教育委員会 二〇〇五『神明塚古墳（第二次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書第一五集

福永伸哉 一九九〇「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究室

水野敏典 二〇〇八「古墳時代前期柳葉式鉄鍔の系譜」『橿原考古学研究所論集』第一五、吉川弘文館